

討議と質疑応答

シンポジスト

中里 英樹
高石 恭子

斎藤 環

指定討論者

北原 恵
横山 博

司 会 穂苅 千恵

穂苅：それでは、時間になりましたので第二部を始めます。

五時半まで一時間半、どうぞ最後までよろしく願います。

第二部からは二名の指定討論者を加え、議論を展開していきたいと思えます。お一人目は、甲南大学文学部社会学科教授の北原恵先生です。ご専門は表象文化論、ジェンダー論、美術史です。アートから広告に至るまでの表象文化を、ジェンダーや人種による偏見や権力関係の視点から読み解いていらつしゃいます。では北原先生、よろしく願います。

北原：ただいまご紹介にあずかりました、本学社会学科の北原と申します。指定討論にお呼びいただいたことにたいへん感謝しております。よろしく願います。

今日は非常に珍しい顔ぶれのなかでコメントさせていただくことになりました。ずいぶん畑違いなものですから、ドキドキしながら参加いたしました。本当に他領域の方のお話でしたので、まず「コメントすることの困難」を感じております。しかし、私はジェンダー論のほか、この大学では映像文化論、表象文化論、メディア論を研究しておりますので、意外と共通性も出てきて、非常に面白く聞かせていただいたと実感しています。うまく交通整理しながら、先生方のお話の特徴をいくつか出してみて、それぞれの共通性や疑問に思ったことなどをお話ししたいと思います。

まず、中里先生は私の社会学科の同僚で、しかもジェンダー論も扱っておられ、私と非常に近いところにいるので、「機会があったらご一緒しましょうね」といっても言っていたんです。なかなかそういう機会がなかったので、今日は本当に感謝しております。

中里先生がデータから示されたポイントとして、三つ挙げられます。まず、日本の年齢別女子労働率の推移についてです。子育て期に就労率がいったん低下する部分がこの三〇年ぐらいかけてボトムアップしてきたのは、巷では女性が進出するようになったからだと言われているんですけども、そうではなくて、独身者あるいは結婚して子どもを持たない女性が増えたためだと、先生は指摘されました。つまり、一見家庭と仕事の両立が進んだように見えるデータは、実は違うということです。ここはとても重要な点です。新聞でもマスメディアでもそういうデー

夕の解釈はなかなかさされていらないと思います。皆さんも、「あら？」と思われたかもしれません。そこで一つ質問ですが、この解釈は家族社会学では常識あるいは共通認識になっているのでしょうか。

それから、女性が外で働くことについてですが、ほとんどの女性が出産後、退職もしくは育児休暇という形で職場から離れている実状が示されました。そして母親の就労の有無に関係なく、父親の育児への参加率が低い点が指摘されました。ほかの先生方の話のなかでもそういったデータがいくつか出され、その背景にあるのは三歳児神話であるということや、改善のためには今後の労働環境の問題を变えていく必要があるということが言われたと思います。

今日は前半の分析を非常に丁寧にしていたいたいたのために、解決策のところを駆け足になってしまったかと思えます。先生のほかのご論考や、前回の研究会（三月一〇日）でのご発表の資料などを見えますと、解決策の提案に相当力を入れていらっしやあって、たいへん面白く拝見しました。その解決策をここで繰り返しますと、「自発的な労働時間の選択をすること」「多様な働き方を保障していくこと」が提案されています。具体的には、たとえばパートタイム労働に正社員の権利や賃金を保障することが必要だと述べられています。私もその点に関しては非常に賛成です。同価値労働に対して同一賃金が支払われるということは、オランダなどではかなり進んでいます。日本ではまだまだ難しいんです。ではどうすればいいのか。このところをお

伺いたいと思います。

それから、働き方のダイバーシティ（多様性）ということと、P & Gという企業の例が紹介されました。この例は非常に興味深く聞かせていただきましたが、正社員に限った話だったと思います。これは、効率を上げるという意味で、企業の側にとっても得なやり方だと思えます。企画部門などの専門職の社員でしたら、フレックスタイムなどの導入が仕事にいい効果として跳ね返ってくるのは、体験的にもあることです。

私が危惧するのは、多様な働き方が正社員や専門性の高い仕事の特権になってしまわないか、固定化されるのではないかということです。つまり、パートに対してはどのような取り組みがあるのか——たとえば機械的な単純労働と言われるものに従事している圧倒的多数のパートの女子労働者が、二極化する働き方のなかでどうなっていくのかということ、取り残されて、ますます厳しい状況になっていく気がいたします。その辺について、何かご存じでしたら教えてくださいたいと思います。

それから、中里先生だけでなく、会場の皆さんとも共有したいのは、労働概念のジェンダー化の問題です。たとえば生活時間を調査する場合に、かつては「仕事／余暇」という二分法で調査が行われてきました。それに対して経済学ではよく言われていることで、ジェンダー的な視点から「ペイドワーク [paid work] / アンペイドワーク [unpaid work] / 余暇」という三分法に変えていくべきだという主

張があります。つまり、外で働いて給料をもらってくるペイドワークだけが労働ではなく、家のなかでの家事も育児も労働なわけです。これはアンペイドワーク、つまり賃金が支払われない労働ですが、今までは労働として認められてこなかった。「育てることの困難」という問題を考える場合には、労働という概念のジェンダー化をいつも意識しながら考える必要があるのではないかと思います。労働と聞くと、「お父さんの労働」、つまりペイドワークと聞いてしまう。このことをよく考え意識化することについて、今日のシンポジウムでも議論できればいいと思います。

二番目の高石先生のお話に移ります。高石先生のお話を伺うのは今日が初めてですが、本当に面白くて、引き込まれているうちにあっと言う間に終わってしまいました。私は表象文化論をやっていますので、特に人魚の話は、そんなふうに読めるのかと思って、とても興味深く伺いました。人魚が行き来する陸と海は、へ男性原理／女性原理へ、男性領域／女性領域へという二項対立のシンボルとしてだけではなく、たとえばへ都市／地方へ、あるいはへ文明／自然へというように、いろいろな二項対立の問題としても読み替えることができると思います。

私が疑問に思ったのは、最初のほうで話された子育てをめぐる今日の状況、とくに東灘区での育児の実態調査についてです。たとえば出産時における父親の立ち会いは、この六年で急激に増えています。二〇〇〇年度では三分の一だったのが、二〇〇六年度ではおよそ半数の方が立ち会っ

ていらっしやいます。このことをどういうふうと考えていくのか。また、これは東灘区の一部の状況なのか、それとも全国的な傾向なのかを教えてくださいたいと思います。

といいますのは、一方で、中里先生のお話では、父親の育児時間はデータとして全然増えていないという指摘がありました。立ち会い出産が増えている状況にあっても、依然として男性の長時間労働はある。また、父親の育児参加の時間は二四カ国中最低だという汐見先生のご指摘もありました。父親の立ち会いが増えて、一見すると男性の育児時間、あるいは男性の育児に対する姿勢が急激に改善されたかのように思えるんだけど、現実の参加時間は全然変わっていない。その根本的な障壁は、労働のあり方だと考えられます。男の人がいくら育児に参加したいと思っても、状況がそれを阻んでいる。それと同時に、出産に立ち会うことが男の人を育児の一端を担ったかのような気にさせ、非常に象徴的、儀礼的なものになっている可能性があります。立ち会いの急増が育児時間に結びつかないことは、相当の根拠があるのだらうと思いますが、その辺をどう考えておられるのか、お伺いできますか。

次に、ビデオで一部を見せていただいた汐見先生のお話にコメントするのは、ご本人がここにいらっしやらないので気が引けるのですが、あらかじめ読ませていただいた（六月九日）研究会の資料や先生の著書などをふまえて、ポイントをまとめてみます。汐見先生は六月の研究会で、男の育児について歴史と現状からお話しされました。江戸

時代に育児の中心にいたのは父親でした。それが現状では先進国二四カ国では最下位で、男性の育児参加が非常に少ないことが日本の特徴になっています。それから、もう一つのポイントとして出てきましたのは、「親父の会」や「育時連」といった男性の集団をつくるという動きです。これは日本の特徴であるとおっしゃっています。その理由として、日本では一九九〇年代から労働組合組織率がダウンしたことがある。ムラ的中间組織の崩壊があつて、それに代わるものとして「親父の会」などが出てきているのではないかとというのが汐見先生のご意見でした。そして、こうした日本の現状と特徴をふまえ、これから男性がもっと積極的に育児参加できるように、育児の世界に「面白さ」という価値観を持ち込みましょうと提案されました。つまり、面白いという価値観を全面的に押し出すような接し方は男性のほうが目得意だから、それを積極的にやることによつて育児の状況も改善するのではないかとというご提案だと思っています。

私は、面白くという価値観で行動することは男性の方が得意なのではなくて、むしろそのような価値観が男性性として認められてきただけだと思ふんです。つまり逆なんです。それから、男性が育児に参加しようという非常によい提案をなさっているんですが、育児の面白さという価値観を広めることばかり強く言うことによつて、へ面白い／面白くないという二分法によるジェンダー化が進む危険性が危惧されます。面白くないことは、つまり日常なんです。『男の料理』がひと頃言われましたが、時々だから存

分に楽しくできるということもあるわけです。面白くない日常性を女性領域として押しつけ、面白い非日常性を男性が引き受ける——そういう二分法につながるかという危惧を、私は感じました。

逆に、なぜ女は面白さを享受できないのか。あるいは享受していないと思われているのか。本当は面白さを享受しているかもしれないのに、なぜそう言われないのか。価値のジェンダー化というところに注目して、こうしたことを問うべきだと思います。

最後に斎藤先生のお話です。つい先日まで、『戦闘美少女の精神分析』（太田出版、二〇〇〇）を書かれた斎藤先生と、『家族の痕跡』（筑摩書房、二〇〇六）の斎藤先生が同じ方だと結びついていませんでした。

『家族の痕跡』は本当に面白い本で、引き込まれてあつたという間に読んでしまいました。このなかに、「臨床家が扱うのは事実関係ではなくて、幻想の問題なんだ」と書いておられます。たとえば虐待があつて、それが本当かどうかというよりも、虐待があつたとその人が認識していること自体は事実なわけですから、そこを扱うとおっしゃったことに非常にはつとしました。そして「幻想は嘘ではない」とおっしゃっています。表象分析というのもまさにそれを根拠にしているんですね。表象されたことが本当かどうかはいったん保留するんですが、表象されたことは事実なわけですね。そこから出発していったって、その世界がどういうものであつたか分析していくんですが、精神分析と非常にア

プローチの方法が似ていると気がつきました。表象は事実ではないとよく誤解されるんですが、幻想が嘘ではないのと同じように、表象は事実ではないということではないんですね。表象は嘘とイコールではないのです。

それから、研究会の報告や先生の書かれたものも読ませていただきました。そこには、現象を感情論や印象論だけで攻撃しても駄目であって、困っている人に救いの手を延べ、長期的な視点で見極めようというご指摘がありました。全くそのとおりだと思います。困っている人に救いの手を差し延べましようという言葉は、重要だと思います。そういうことは本当に必要なはずなのに、アカデミズムの世界では滅多に言われない言葉です。

今日は、社会全体における精神障害が軽症化していることや、現代の若者のひきこもりは反社会性ではなく非社会性の問題であり、反社会と非社会をきっちり分けるところから見えるものを教えていただきました。私の研究している領域との近接性についてもいろいろ考えさせていただきました。以上です。

穂苅：ありがとうございます。北原先生の討論を受けて、シンポジストの先生方にコメントをいただきたいと思います。

中里：北原先生とは同僚で研究室も近いので、こういう場で改めてお礼を言うのもなんですが、どうもありがとうございます。いろいろなコメントしていただきましたが、質問

ということでは、大きく二つのポイントがあったかと思えます。一つは、女性の社会進出によっていわゆるM字カーブの底が上がってきたことが、仕事と子育てとの両立を表すものではないということ、家族社会学の共通認識になっているのかどうかという質問。もう一つは、正社員とパートの問題で、そこには二つのご質問があったかと思えます。一つはパートと正社員の境界を解消していくための方法について。もう一つは、先ほどのP&Gの働き方の例は正社員だけのもので、そうした待遇は正社員や専門職の特権になっていかないかという質問でした。この二つの質問は、一つにまとめてお答えできる内容かと思えます。

まず一つ目の質問についてですが、労働力率の統計や、結婚の統計を見たりする人は、おそらく暗黙のうちに気づいていると思います。多くの女性が出産を機に仕事を辞めることを示す図を、私はだいぶ前から使っていますが、よく見るようになったのは最近だと思えます。これは厚生労働省によるパネル調査で、二〇〇一年に生まれた子どもをずっとたどっていくという壮大な調査です。二〇〇一年一月一〇～一七日と、七月一〇～一七日生まれで出生届が出されているすべての子どもの親に調査票を送っています。五万以上という数で、回収率は第一回調査で九割近いものでした。厚生労働省がこういう調査をすると発表したときに、私の子どもの予定日と重なっていたので、対象になったら面白いと思ったんですが、出産が一週間ほど遅れて対象から外れてしまいました。調査は出産半年後からスター

トし、それを毎年同じ時期に同じ対象者に送り続けています。もう四回分ぐらいのデータがまとめられているようで、いろいろなことがわかってくるのではないかと期待される調査です。実際にどのぐらいの人が出産を機に仕事を辞めるのかは意外によくわからなかったたので、私もこの調査には注目してきました。たまたま数日前に内閣府と兵庫県共催のフォーラムがあつて、猪口少子化・男女共同参画担当大臣（当時）が、テレビで見たままの様子で（政府の少子化対策などについて）いろいろ熱く語っていらつしやいました。そこでもこういったデータが使われていまして、女性が子育て期に仕事を辞めている現状についての認識はかなり共有されてきていると思います。しかし、M字カーブの底の上昇と未婚化・少子化の進行を結びつけて説明しているものは、それほど見かけません。そこを結びつけたという点では、ちよつと変わったことを言ったのかなと思います。

次に、もつと難しいパートと正社員の境界の問題です。まずご紹介したP&Gの事例ですが、これは正社員を対象にしたものです。私もインタビューのなかでパートの状況についていろいろ尋ねてみたんですが、P&Gの制度がパートの人や、派遣などアウトソーシングの形で働いている人たちにまで適用されているわけではありません。さらに、私自身が疑問に感じて注目したのは、正社員かパートか、という二分法です。女性が子どもを持ったときに、働くか働かないかという選択と、正社員かパートかという選択が

あります。働くか働かないかの二分法が一番よく見られますが、働くとなると、パートか正社員かという次の二分法が出てくる。正社員の働き方を想定したときに「これでは子育てと両立できないだろう」という意識からパートを選ぶ人は、かなりの割合であるだろうと思います。しかし、そのどちらかを選ばないといけないのではなくて、同じ正社員でもいろいろな働き方があるはずですよ。たとえば二割時間が短ければ二割給料が減る、という働き方があり得る。それでもなお、パートなどの単純労働が格差のある形で残るかもしれませんが、正社員の柔軟性を高めていくことがパートと正社員の二分法を脱却する可能性を持っているのではないかと感じます。

私のゼミの学生でも、「男女共同参画には反対だ」と言う女性がいいます。なぜかと聞いたら、「女子でも転勤させられるから」と言っていました。要するに、女性が正社員として働くというのは、家に子育てをする人あるいは介護をする人がいる状態を前提とした、今までの男性たちのルールのなかで働くことだと認識しているわけです。そこから漏れてしまうとフリーターやニートという扱いになる。ニートの数の統計には、一度就職したことがある人がかなり含まれているといえます。ある本には、今の企業の働き方ではやっていけなくなつて辞めた人がその統計に含まれていると書いてあります。正社員かパートかのどちらかを選択しないといけないという状況を逃れる可能性として、正社員の働き方の柔軟さの導入があるのではないか、というの

が一つの答えです。

先ほど内閣府と兵庫県が共催したフォーラムについて触れました。これは兵庫県が三者合意といって、行政と経営者協会と連合兵庫（労働者）が協定を結んだり、一緒に研修マニュアルをつくったりして、働き方の見直しについて歩調を揃えてやっていこうとしている試みの一つです。このフォーラムでは、さまざまな企業の取り組みが紹介されました。たとえば株式会社エス・アイ（姫路市）という非常に小さい企業ですが、そのトップの方が、ご自身の会社員時代にたいへんな長時間労働をした経験から、残業のない会社をつくりたいといって、いろいろな試みを行っています。この取り組みは非常に極端ですが、試行錯誤をするなかで、すべての社員を時間給制にしたんです。正社員は突然給料が下がっても困りますので、もともともらっている給料を時間給に換算して、とりあえずはそれを適用する。それが実際にうまくいくのかどうかは今後の検証を待たないといけません。パートとの格差を縮めていくという点では一番思い切ったことをされている例です。そういう企業の今後を見ていく必要があると思います。

穂苅：ありがとうございます。続けて高石先生、お願いします。

高石：いろいろコメントをありがとうございます。最初に、人魚の話について少しだけ補足しておきたいと思います。だいたいお急ぎ足でお話したので、なぜ人魚が出てくるのか

と戸惑われた方もいらっしゃるかと思います。なぜ私の人魚に関心を持ったかをお話します。

私の専門は臨床心理学で、主にユング派の心理学の勉強をしてきました。カレン・A・シグネル先生というアメリカの女性の分析家がいらっしゃいます。女性の夢分析を仕事にされていて、一〇年間ぐらいの集大成として『女性の夢』（誠信書房、一九九七）という本を出されて、私はその翻訳の仕事に関わったんです。女性が自分の女性性と母性をどんなふうに生きていくのかに悩んで、夢分析を受けるわけですが、そのなかで「人魚」というイメージが非常にしばしば現れてくる。人魚はずっとさかのぼっていくと蛇にたどり着くんですが、それは水の中を悠々と泳ぎ回る太古の母性性の象徴であるとユング派では考えられています。ただし、現代の女性の中で人魚のイメージは、非常に悲劇的な形で葛藤を伴って現れてくる。その辺をどういうふうに読み解いていったらいいのかが書かれた部分があります。それがきっかけで関心を持って、一時期人魚のお話を集めていたことがあるんです。

先ほど駆け足でお話したように、そのなかで気がついたのは、人魚の話が悲劇になるのは近代になってからのことで、現代になるとまた新しい形で展開していくということです。人魚の話はいろいろありますが、だいたいは、陸に憧れて憧れて、でもうまく生きられなくて命を失うというお話でした。けれども、だんだんお父さんの力を借り、父の守りを得て陸で成功し、幸せになる話が変わっていき

ます。ところが今度、自分の子どもを持つ段階でうまくい
かなくなりそうです。生まれた娘が非常に苦労するんですね。
そこでもう一回海の世界に戻ってみるわけです。さらにま
た海から陸へと戻ってきて、海と陸の間を行ったり来たり
する。そうした二つの世界を往復するなかで、何とか次の
生き方を模索している。そんなふうにはテーマが変わって
いることが非常によく見えてきたわけなんです。細かいとこ
ろは、人間科学研究所が前回の五年間で出しております叢
書の第二巻『現代人と母性』（新曜社、二〇〇三）という本
に収めておりますので、詳しく知りたい方はそちらを参考
にしてみてくださいと思います。

次に、立ち会い出産の増加現象をどう読み解くのか、と
いうご質問にお答えします。確かに、数字を鵜呑みにする
のではなく、いったん疑ってみることは必要だと思えます。
とはいえ、出産の立ち会いは、儀式や免罪符のためだけに
できるほど簡単なことではない、というのが周辺の話を聞
くなかでの私の実感です。お産の立ち会いは、突然行っ
てもだめなんですね。あらかじめ両親学級に参加して指導を
受けておかないといけません。当日血を見てふうっと倒れ
てさらにケアの必要な人を増やさないように、厳しく教育
されるわけです。まだまだ出産にまつわる事柄に怖れを感
じる男性は多いようです。できれば立ち会わないで済ませ
たいというのが本音ではないでしょうか。それでも、なん
とかその場に臨もうと男性たちが努力して、少しずつ増え
てきたのがこの数なのではないか、と私自身は感じていま

す。

汐見先生が研究会で、「男性が、あるときから、どこから
かの社会圧力で子育てに参加を求められるようになって、変
化が起きてきた」という表現をされていました。「どこから
か」というのは、戦後のいろいろな子育てを巡る二重性
（ダブルバインド）を背負わされてきた女性たちの集合的な
力といえますか、要請だったのではないのでしょうか。それ
は、「私たちだけに担わせるのではなくて一緒に考えてよ」
という問題提起としての圧力です。そこにいつの間にか少
子化の問題も絡んできて、政府による「父親も子育てを」
というキャンペーンが張られました。でも私はあれがそれ
ほど影響力を持ったとは思っていません。たとえば、何年
前だったかちよつと忘れましたが、当時安室奈美恵さんと結
婚されていたサムさんというダンサーが、子どもが生まれた
ときに、「子育てしない男を父とは呼ばない」というキャッ
チコピーで大きなポスターに出ましたね。あのポスターが
どこに貼ってあったかという、地域の児童館です。「ここ
に行くのって誰よ？」と考えると、結局、子どもを連れた
お母さんしか見ていないわけです。これを大企業の正面玄
関に貼ってよ！と私は思いました。政府のキャンペーンと
いうのは、一人ひとりの男性に伝える力は持ち得ず、むし
ろ、女性たちからの「もつと子育てを一緒にやってほしい」
という要請で、男性は動いてきているんじゃないかと思
います。ただ、これが今後どんなふうに変化していくかとい
うのはまだわかりません。

それから、全国的にはどうなのかというご質問もありました。今回は神戸市東灘区のデータでしたが、もう一つ参考になるものを挙げますと、ベネッセの研究所が首都圏で大規模にやった子育て調査（二〇〇三年）があります。それを見ても、父親の出産の立ち会いはほぼ半数、似たような傾向が出ています。地方に行けばまた違う数字がでるかもしれませんが、少なくとも都市部においては半数程度に達しているのはほぼ間違いなようです。

今回の調査と六年前の調査は、質問項目が全く同じではないので単純比較はできないのですが、六年前の調査では、男性の子育て参加について尋ねる項目に、「もっともっと夫に子育てに参加してほしい」「手伝ってほしい」「もっと理解してほしい」という反応がとて多かったですね。その翌年には父親対象で子育て意識調査も実施しました。そのとき記述されていたお父さんたちの生の声は、「本当はもっともっと子育てを手伝いたいんだけど、でも時間がないんだよ」という感じのものでした。やらなくちゃいけないということが刷り込まれていて、意識のうえではわかっている。けれども、実際にはなかなか体がついていかない。現実的な制約としても許されない。「気持ちはあるんだけど、でも動けないんだよ。明日こそやるから、頑張るから、見ててね」という、不登校やひきこもりの子ども言葉とすごく重なって見えてきました。それが、今年の調査では、少し自然体に近づきつつあるのかなという、かすかな期待が持てる結果でした。詳しい結果についてはまた報

告書を出す予定ですので、そちらを待つただけだとは思っています。

穂刈：ありがとうございます。斎藤先生、お願いします。

斎藤：本の紹介をしていただいて、大変ありがとうございます。子育てというより、もう少し広い精神分析や表象分析に関わるコメントをいただいたと思います。私は臨床で精神分析を用いているわけではありませんが、精神的な発想を治療に役立てる局面は多々あります。そこでは、まさに幻想の問題は非常に重要なパートを占めています。

たとえば、トラウマという言葉が非常に流行しましたが、これは実体物として扱うと非常に危険なものです。「体の外傷と同じように、心の外傷にも手当てが必要」。ここまではいいんです。ところが、誰が治療費を払うのかとか、加害者と被害者の関係はすつきり分かれるのかということになってくると、身体的な外傷と全く同じというわけにはいきません。トラウマを負った人の資質の問題、その体験をした状況やコンテクストまでを含めて考えると、そう簡単に割り切れる問題ではなくなっています。犯人探しをして一件落着とも言えない。

子育ての問題に絡めて言うなら、たとえば、幼児虐待の加害者である親と被害者である子どもの関係が悪いほうに向かうかという、必ずしもそうとは限らない。被害を受けた子どものほうに自責の念や親への愛着が生じるという、

ややこしい状況が起こつてくることもあります。そうすると、加害者を断罪したり、両者を切り離したりすれば一件落着、とは簡単にいかないわけです。

ひきこもりの当事者も、自分は親の育て方の失敗例である、と言います。今は確かに心理学化、心理主義化が進んでいますが、さつきご覧いただいた映像からもわかるように、若者は、すでに三〇年前から自分のことを医学用語で語っています。「僕は過呼吸」とか、「僕は過敏性大腸」とか。「学校に行く前におなか痛くなるんです」とは言わず、診断名を自分で言ってしまう。別にそれがいいとか悪いとかではなくて、そういうふうな医学的知識が日常の中に浸透してきて、人々が自己規定するうえでもそれを使うという習慣がこの当時から前景化しているわけです。

そういうなかで、トラウマというものを実体物であるかのように扱わずに、変な方向性が出てくる。だからこそ幻想の位置は非常に大事だと思ふんです。精神分析ではこれを、事実とも嘘ともつかない「心的現実」と呼んでいます。そういうものがあると想定しなければ治療にならないわけです。こういった発想は悪しき心理学化と言われてしまうかもしれませんが、私は、これは子どもを育てるうえでも部分的には応用できる発想ではないかと考えるところがあります。子どもはまさに心的現実、言い換えると幻想の中に生きていて、存在しないパートナーと会話をしたり意味のわからないがらくたみたいなものを大事にしているたりします。子どもの行動は、そういう心的現実によって

規定される部分が相当あると思います。それが成長と共に減少して、だんだん現実と幻想の区別がつくようになっていきます。

ひきこもりのケースを見てみると、最初のうちは、自分は親の間違った教育の犠牲者だというようなことを延々と言い続ける方が結構います。ところが、だんだん家族関係がましになってきて、治療関係もそれなりに良好になってくると、あまり言わなくなつてくるんです。切実さがどんどん希薄になっていきます。そのとき、まさに幻想が消える場面に立ち会っているという感じを持ちます。最初ものすこくリアルな幻想だったものが、関係性の変化と共にだんだん希薄になって、その人の行動に及ぼす影響力がどんどん低下していくわけです。

そういう経験を重ねていきますと、やはり精神分析家たちの言うところの心的現実のリアリティや、そういうたものに対する治療的働きかけが持つ力は全く色あせていないと感じます。あまりにもエビデンス——統計的根拠があるかどうかとか、脳の中の部位が特定できるかどうかとか——だけを強調していくと、トラウマや幻想の問題は必ず行き詰まります。まさに汐見先生もおっしゃっているような部分ですが、どこにも還元できない中間領域は、ちよつとした「遊び」の部分として、臨床の場面でも確保しておく必要があると思います。

子どもの心の中にも、幻想とも現実ともつかない部分は必要ではないかと常に意識しています。ごっこ遊びが典型

ですが、遊びは幻想と現実の中間領域とのつき合い方を学ぶには非常に大事なものだと思います。私は、遊ぶ中にもエディプス的なモーメントはたくさん含まれていると思います。なぜかという点、遊びにはルールが必要で、ルールがなくては、遊びが成立しないからです。ルールに縛られつつ、そのルールの中で別な意味での自由を獲得していくこと。それが、遊びが成長にもたらす意味ではないかと思っています。子どもは、遊びながら幻想と現実のつき合い方を習得していきます。遊びによって、現実感覚といわれるようなものが別の角度から身についてくる。「現実はこのうだ」と教え込むという方向もあるのでしょうか、自分で学習するのが一番強いわけです。

幻想と直接関係ないかもしれませんが、治療でも、あるいは子育ての部分でも大事になってくるのは、何かをさせたいときにいかに動機づけるかということです。これはいまだに答えが出ていない困難な問題です。内閣府が二ト問題やひきこもり問題について論ずるときも、錚々たる委員の顔ぶれが並びますが、だいたい皆さん頭を抱えるのは動機づけです。どうすれば若者の無気力化を防げるか。あるいはどうすれば若者に仕事をしていただけるか。たとえば、敷居を下げて働きやすくするという発想があります。あるいは、ちよつとやってみましょうと誘惑してみるという方法もある。それぞれそれなりに有効ですが、一定の限界を抱えています。ある程度以上の割合では有効性が証明できないんですね。体験主義という言葉もあります。たと

えばキャンプをさせたり、農作業に従事させたりなど、戸塚ヨットスクールではありませんが、過酷な経験をすればリアリティが身につくという幻想はまだ許容されています。しかしこの発想もだんだんと通用しなくなりつつあります。どのような価値で動機づけするかという問題は、さつきから問題になっている現実検討や、幻想と現実の境目の問題、このあたりをどう学んでいくかという問題に深く結びついているのではないかと思いついておりました。私は以上です。

穂苅：ありがとうございます。では次に、お二人目の指定討論者の横山博先生にお話しいただきます。横山先生は甲南大学文学部人間科学科の教授で、ご専門は精神医学とユング心理学です。では横山先生、よろしくお願いします。

横山：北原先生に非常にうまくまとめていただいたので、私は改めて詳しく述べることはやめて、いくつか気になったことについて質問していくことにします。

まず中里先生のご発表ですが、少子化の現状や、子育てをしながら仕事をする女性は増えていないということが、数字としてよくわかりました。P & Gの例での「幼児を育てることを可視化する」という視点は、とても面白く聞きました。P & Gではそういう流れをトップが主導しているということでしたが、それをほかの会社で実現していくのは現実問題として難しいのではないのでしょうか。私は二〇

年間ほど、某大手ゼネコンの産業医兼カウンセラーをやっております。高度経済成長期から今に至るまで、週一日通い続けているんですが、やはりものすごく過酷な状況なんです。中里先生は平均で一二時間働いていると言っています。ですが、いわゆるエリート社員はもっと働いています。それを思うと、子育てに参加するどころではない現実が浮かび上がってきて、「子育てを可視化する」ことが社会全体でどういう形で可能になるのだろうか、という思いがいたしました。やはり、産業構造そのものに大きな変化がない限り、変わりようがないのではないのでしょうか。特に汐見先生が明確に指摘されていましたが、急速な近代化が日本の男性を家庭から引き離し、育児に参加する機会を奪ってきたわけです。極端な言い方ですが、そういうなかで起こってきている少子化という流れは、男性社会を前提として近代化を推し進めてきた日本の政府のありように対する女性の反乱ではないか、と私は考えています。だとすれば、小手先の対策ではどうにもなりません。その点をどのようにお考えになつているかを一点目にお聞きしたいと思います。

二点目はインターネットの子育て相談についてです。核家族化で子育ての相談ができない人が、困ったときにすぐインターネットでやりとりできることをポジティブに評価されていましたが、逆にネガティブな面はないのでしょうか。いつかうちの卒業生が話していたことでも印象に残っているのですが、三歳児健診のときに、子どもが泣き出すと即座におやつをあげるお母さんがいたんだそうです。

子どもを泣かせたままにしておくことができないんですね。しかし、そういうどうしていいかわからないときに、その不安感を抱えて耐えていくということも、子育てに含まれる重要な要件ではないでしょうか。そう考えると、すぐに情報を得ることは、果たしていいことなのだろうかという疑問がわいてきます。その点をお聞きできればと思います。

高石先生のお話も非常に面白く聞かせていただきました。アンケート用紙に「配偶者」の項目が落ちていたという話がたくさん興味深かったです。男というのはあてにされていないんだな、やっぱりそういうものなのかなと、考えさせられました。

いくつか質問したいことがあります。日本社会には母性神話が根強くて、「子育てを楽しいと言わなければならぬ文化があるのではないかとおっしゃっていました。確かにそういう面はすごくあると思います。ところが統計的には、先進国と比較してみると日本では「子どもを育てるのが楽しい」が二〇・八%でわりと低い。これはいつたようないうことが要因とお考えなのかを一点目にお伺いします。

次に、個になることと母を生きたることは対立する概念であり、その両立の難しさを一人ひとりの女性が考えていかなければならないというお話がありました。このときおっしゃっている「個になる」ということは、いわゆる男性的なモデルをお考えになつているのか、それとも女性の生物学的所与性を前提とした個の在り方——ユングのいう「ナチュラル・マインド」や、E・ノイマンのいう「母権的自

我」のような——をお考えになつていいのか。それを二点目にお聞きしたいと思います。

三点目には、これは高石先生のご主人（高石浩一氏）もおっしゃっていることですが、母と娘の距離の接近という現象が起こってきていることについてです。少子化が進み、家事労働は減っているにもかかわらず、お母さんは仕事のほうにスツといけない。臨床の場面で時々見るのは、娘との距離が非常に近くなつてしまつて、娘が母を支える役割をとらされているものです。いま母と娘という関係に何か変化が起きているのか、そのことについてどうお考えなのかをお聞きしたいと思います。

斎藤先生については、『毎日新聞』に評論を載せていらつしゃいまして、どうして先生はこういう雑誌をたくさん読む時間があるのかといつても不思議に思っています。その明解さとともに感心している次第ですが、今日のお話も非常に興味深く聞かせていただきました。

いま、臨床の現場ではスキゾフレニア（統合失調症）の軽症化がかなり進んでいまして、外来の診察だけでやっていける場合が結構多くなつています。こういう、症状は比較的軽いけれど就労までには至らないという人たちが、たくさんいます。統計的に言えば、日本人を一億人とすれば、七〇万人のスキゾフレニアがいても不思議ではありません。これは中井久夫先生の言葉だと記憶していますが、「世に棲む患者」みたいな形でひきこもつて生きている人たちは大勢います。ひきこもりの概念は臨床概念とは異なつてい

ようですが、ひきこもりとその人たちとの重なりについてどうお考えになつていいのかということ、一点目にお聞きしたいと思います。

二点目はメタ・エディプスのお話に関してです。去勢については先生のおっしゃったとおりだと思いますが、メタというのはどのような意味合いでおっしゃっていたのか。父親が家での父親役割をとれなくなつて、社会と直接結びつくという意味でメタとおっしゃっているのでしょうか。そのあたり、私の理解が及ばないところがありますので説明いただきたいと思います。

最後の質問です。困難さに向けた提言のところでおっしゃっていた、「転移関係を一つのモデルとして」というのは、多分ラカンの考え方だろうと思うんですが、すごく面白い考え方だと思いました。そのときに、「欲望の転移とは中身ではなく器が移ることだ」とおっしゃったと思います。とても興味深いお話だったので、この欲望と器についても少し詳しく聞かせていただけたらと思います。以上です。

穂苅：では中里先生からお願いします。

中里：「幼児を育てることを可視化する」という表現は、昨日考えて今日初めて使ったのですが、面白いと言っていただけであらうございました。それがなぜP&Gでは可能になつていくかということですが、そもそも、全体のレベルで可能になつていくかということ自体、確かめられて

いるわけではありません。さつき言った試みやイベントは目の前で見たことですから確かですが、それがどこまで浸透しているかということについては、これから見ていかなんといけないと思っております。ただ、ワークショッブをやるという動き自体がどうして起こってきたかという点についてというところ、会社の人たちは「トップの本気」とよく言っています。八〇年代までは、ある意味、建前でダイバーシティということをやっていました。しかし現在は、男女平等についてもそうですが、それは企業としての戦略にもなりえるということにトップが気づいてきたのです。人種、性別も含めて、いろいろな生活条件を抱えている人が職場で共存できる環境をつくることは、さまざまな顧客のニーズに耳を傾けるといふ意味でも有効です。それは消費財メーカーだからと言われるけれども、それだけではないのではなにか、と会社の人は言っています。

P & Gはアメリカの会社なのでドライな印象がありますが、社員は、上司とよく話し合っており、仕事量の調整などをやるそうです。部下が個人的な相談をしたいという希望があれば、例えば、いつ頃子どもを持つ予定なのか、子どもを持つたらどのくらいの範囲の仕事しかできないのか、などを相談して今後の予定を決める。新たな予定が入ってきたときには、この部分は削らないと無理だろうと話し合う。どうしても手に負えない範囲であれば、他の部署や外からの応援を頼む。パートや派遣という選択肢も出てきます。そういう調整を行なうことが上司の重要な役割になってい

ます。それができるかどうかは上司自身の評価の重要なポイントになっていくそうです。

またある大手機械メーカーは最近、働きやすい会社だとか、女性が活躍している会社としてよく出てきますが、その社員の方に聞くと、昔は徹夜が当たり前の会社だったんだそうです。今では有給休暇もとりやすいし、確実に消化できる。時間の融通もわりとつけられる。何かのきっかけはあったようですが、この例は、どうしても変われないものではないという一例として挙げることでできそうです。とはいえ、一社員の立場ではなかなか難しいというのが実状でしょう。トップの決断が非常に大きいということを、いろいろなところで見ていると感じます。さらに会社の強さも必要だと思えます。働き方を変えていくということが、本当に全社会的に可能かどうかを追究することは、今後の私の大きな研究テーマでもあると思っています。

インターネットですぐに答えが得られることのネガティブな側面についてですが、すぐおやつをあげて泣きやませるといふのはよくわかります。そういうのに耐えられないという感じもわかります。私も、うちの一番下の子どもは飴をあげるとすぐ泣きやむので、ついやってしまっています。これも先ほどの可視化の問題に関係していると思いますが、社会にいたる大半の人は子どもがいる状態に慣れていません。そういう公共の場で子どもを泣かせるプレッシャーは非常に大きいんですね。そういう意味では、個人の手法の問題というよりも、子どもがいる状況が当たり前でないという

社会の現実をまず見る必要があるのではないかと思えます。インターネットのやりとりを必要としているのは、身近に常時相談できる人がいない方たちです。そこに頼らないで済めば、それに越したことはないと思います。インターネットは、不安や苛立ちにそのまま耐えていては子どもに手をも上げてしまうという困難を抱えている人の、やむを得ない手段として位置づけられているように思います。もちろんインターネットのやりとりで感情の行き違いがあつて、さらに苦難を抱える可能性は否定できないので、本当にネットに頼ることがいいかどうかは私自身も懐疑的ですが。ただ、さつき見ていただいた掲示板に関して言うと、管理が非常にしっかりしています。衝突がまったくなくとはいませんが、そうならないようにみんなが配慮して書いているように見受けられます。

穂苅：高石先生、お願いします。

高石：私が言葉にするのにいちばん困難を感じたところを指摘していただいて、ますます困りました。女性は子育てを楽しいと言わねばならない文化的な圧力があるといういわゆる「母性神話」についてです。調査で「楽しい」という答えがあれだけ高率になるのは、四件法にからくりがあります。「非常に楽しい」「まあまあ楽しい」「あまり楽しくない」「ぜんぜん楽しくない」の四択で、「どちらとも言えない」という中間の選択肢がありません。実際、子育ては楽

しいときもあるし、つらいときもあるし、いろいろな意味で非常にアンビバレントなものです。中間の選択肢が用意されていたならば、多くの母親はそこに印をつけるのではないかと思えます。しかしそれでは統計的に問題があるのでは、あえて外してあるのです。そうすると、どちらかと迫られたときには、やはり「楽しい」と答えざるを得ないというからくりがあるのではないかと感じます。だからこそ問い方を変えて、「何のために子どもを育てますか」と聞くと、「楽しいから」があれだけ下位に落ちるといふ結果が出てくるのではないのでしょうか。

フランスやイギリスでは、女性の自己実現の一つの方法として子どもを育てるといふ価値観が高くなっていると思います。自分の成長のため、自己実現のために、子どもを育てることを経験の一つとしてやってみるのであれば、当然それは、つらいからやるというより楽しいからやることになって、自分たちのやりたいやり方でやるということになるんです。フランスはそういう意味では一番ラディカルな国です。フランスでは今でもほとんど無痛分娩ですね。麻酔を打って痛みを感じないでお産をする。すぐに自宅に帰って、子どもは別室に寝かせる。泣いていても放っておきます。一カ月を過ぎてまだおっぱいをやっていると、「いつまでやっているの」と非難される。女性も大人の女性として早く子どもを自立させて、とにかく自分を生きること、を最優先しましょうと言われます。こういうことが一番徹底して、メンタルにも許容される社会が既に醸成され

ているのがフランスだと思えます。いろいろなことを自己実現に向かって価値判断するということが実際にできるのです。

日本は、その上澄みのところだけを上手にとってきているのです。今お母さんたちは、家の存続のためとか、墓を守るためとか、そんなことで子どもを産もうとは考えていません。欧米の人たちと同じように、自分の成長のために、自分たちがもつと成熟するために子どもを育てようと思つて産んでいます。けれども、もつと無意識のところでは、戦前から連続と続く、非常にドロドロとした、「お墓は誰が守るの」という圧力とか、一人しかない娘が出ていくと なったら、「好きにしているよ。でもお母さんはね」という暗黙のメッセージなどがやってくる。そういう二重性の中にいることが、調査からも読み取れるのではないかと私は思いました。

上澄みは西洋的なのに、底のほうには、アジア的あるいは儒教的とも言うべき日本独特のメンタリティがある。日本の女性はその二重性に気づかず、苦しんできた歴史があります。そこで一つの方向としては、欧米のようにもつと女性も個としての自分を育てていけばいいということになります。隣がどうしているか気にしたり、ネットでほかのお母さんの意見を聞いて同じようにしようとしたり、公園デビューしてほかのお母さんの仲間に入ろうとするのにエネルギーを注いで消耗してしまうのではなく、自分たちカッブルが、あるいは自分自身もつと生き生きできるために

どうしたらいいかと判断する。それができるようになれば、もつと「楽しいから」が選ばれるはずなのですが、なかなかそうはならない。「個」をどう考えるかは、一つのポイントだと思えます。

横山先生が二つ目の質問として言ってくくださったように、一般的に「個を確立しましょう」「個人として責任をもちましょう」という個の議論になるときに、あくまで前提となっているのは男性原理に基づいたインディヴィデュアル（個）ですね。それは、「自分の意見」を通して、ほかの関係を切っていくような個のありかたです。そうした男性的な個を鍛えようとして、結局またそれで苦労したのが、少し前の世代の女性たちだと思うんですね。そこが女性の抱える二重に難しい点だと思えます。

確かに男性社会で男性並みに働いて、ある程度の成果を収めることはできたけれど、決して女性として幸せであったり楽しかったりはしないことに、だんだん気がついてきた。やっぱり子どもを産んでみよようになったときに、男性的な個は、なんの役にも立たないことにまた直面したわけです。子どもを産むということは、集合的無意識の世界にもう一回どっぷり浸かることだし、「海に落ちる」ことです。戦後教育の中で、女性も男性社会の価値観を与えられているのに、子どもを産むということは、それが全く通用しないところにドーンとはめられてしまうことだとわかった。私もそういう時代を生きて経験している中で、個と普遍という二項対立ではない形で女性の個性化、女性が個にな

るといのはどういうことなだろうと今ずっと考え続けています。

そのヒントを一つ示してくれたのが、一連の人魚のお話です。一番新しい人魚の物語は、女性も男性も海と陸を往復しながら、絶えずそこでせめぎ合い、何かを見つけていこうとしています。女性の個性化は、両方の世界の往復を繰り返しながら生き続け、二律背反をずっと抱え続けることです。それは汐見先生の言葉を借りれば、中間世界をもう一度しっかり見つけ直すことにもなると思うんです。そこを取り戻すことではないかと思います。それは女性だけに課せられた課題ではなくて、男性と一緒に考えていたのではないといけないことだと思っています。まだ十分にクリアな言葉にはなっていないんですが、少しはお答えになりましたでしょうか。

穂苅：斎藤先生、お願いします。

斎藤：まず統合失調症との重なり合いについてですが、ひきこもりの問題に私が関わった初期の研究が参考になるかと思えます。統合失調症と、いわゆる精神病性でないひきこもりに、家庭環境や症状における違いがあるかどうか、という研究だったんです。その結果、それほど有意な差は認められないというデータが出ました。もともとSocial withdrawal（社会的ひきこもり）という言葉自体は、統合失調症の症状の一つとしてDSM（精神障害の診断と統計

マニュアル」Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders)に載っているものをそのまま引用して使っています。しかし、DSMのひきこもりの定義の中には「精神障害がないもの」という項目がありますので、重なるべきものではないというのがとりあえずの結論です。

それだけでは答えとしてあまりにもシンプルなので少し補足しますと、確かに両者の違いが見た目でわかりにくいのは事実です。単純に状態像を記述的に考えるならば、ほとんど見分けがつかないと思います。長くひきこもっている人と、いわゆる統合失調症の欠陥状態と呼ばれる慢性期の状態にある人との区別をするのは、ものすごく難しいと思います。ただ、統合失調症の患者さんを何百例も診た経験のあるドクターならば、会った瞬間にわかる程度の違いはあると私は考えています。それは例えば、統合失調症の患者さんが醸し出す「プレコックス感」と呼ばれる何とも表現し難い独特の雰囲気です。センスを総動員すれば判別はそんなに難しくありません。状態像は似ていますが、明らかに異なった臨床像として理解できるわけです。

もちろん診断の後薬物治療をして、その反応を含めて確認すると明らかに違いが出てきます。統合失調症の経過にはある種のパターンがあるのですが、ひきこもりにそれはありません。長期間ひきこもっていても状態が安定することはなく、苦しみが持続し続けて、なかなかそこから逃れられないという点でも、はっきりとした違いがあると言っていると思います。

ちよつと大胆な補足をしますと、ひきこもっていること自体に葛藤している人は統合失調症ではないと思います。統合失調症の方は確かにひきこもっていますが、ひきこもっていること自体に悩むのではなくて、自分を部屋から出そうとしない誰かの悪意やエネルギーのようなものが自分を苦しめるのだ、という言い方で表現します。「ひきこもっている自分は、なんてみじめなんだろう」という客観的な視点はあまり出てこない。逆に、ひきこもりの人はそういう葛藤構造がしっかりしているとも言えるわけです。これは印象論ですので、そのまま受け取られても困るんですが、少なくとも私はそういう視点で見ているところがあります。

精神分析家のジャック・ラカンは、統合失調症では象徴界がうまく機能していないという言い方をしますが、これを強引に読み替えますと、言葉を通じての葛藤構造がしっかり維持されているのが、いわゆる神経症圏内のひきこもりということになります。そのたがが少し外れて、崩壊しかけているのが統合失調症であると対比して考えると、ある程度区別がつくような気がしています。単に印象論で終わらせては非常に無責任ですので、その後の治療プロセスにおいて、治療的診断によつて確認できたらと考えています。エディプスに関しては、私の造語も含んでおりますのでわかりにくくて申し訳ありません。先ほど申しましたように、いわゆるエディプス・コンプレックスを現実の両親と子どもに当てはめて考えるところもあれば、現在の家族の役割分担とはかなりずれているところもあるでしょう。文字通り

実際の家族に適用しても私はリアリティを感じません。ただ、エディプス的な機能を、切斷的なものと連続的なもの相互作用によつて人間の成長を促す一つの関係性であると翻訳して考えるならば、そういった機会は家族関係に限らず、至るところにあると考えられます。

日本の場合、「世間」の存在が非常に大きいと思います。よく、世間と個人が対立しているような言われ方をしますが、私はそうは考えません。世間と対立するのは家族だと思います。欧米の「社会対個人」に対応するのが日本では「世間対家族」だと思います。世間というものは、内在化される形で家族にも個人にも影響するわけです。世間は家族の在り方に介入することによつて、間接的に個人に干渉してくるという意味です。世間が家族にエディプス的な働きかけをし、その影響を受けた家族はさらに個人に対して働きかけるといふ二重の構造になっていると思います。それでメタという表現を使いました。本当はメタという言い方は少し不正確ですが、わかりやすくする意味でメタ・エディプスという表現をしています。

去勢についてちよつと補足しておきます。私は去勢の機能を、万能感から抜け出して、より自由な状態をもたらすものとして考えています。言い換えますと、「万能感」の対義語は「自由」であるということです。つまり、個人がルールを内在化して、より自由に動けるようになってくること。これは言語活動を獲得して、表象や思考を自由に操れるようになる機能の獲得とパラレルの関係にあると思います。

去勢によって言語は可能になる、というのはラカン派の言い回しですが、これはそれほど外れていないのではないかと私は考えています。

最後のご質問、転移関係についてです。そもそも転移自体は親子関係の複製（コピー）をつくっていくようなものと言われているわけですから、家族関係に転移という言葉を持ち込むのは反則なのかもしれません。しかし見方によっては、さつきご指摘いただいたように、欲望の転移の最初の形として、親子関係は重要ではないかと考えるわけです。

特にジェンダーの問題に絡めて言うのと、これは私個人の理解ですが、例えば異性愛は、親の欲望が家庭教育を通して子どもに転移して起こってくるものであると考えています。もちろんいろいろなメディアを通じてもそういう教育は起こりますが、内容そのものというよりも器の転移であると考えられます。

それから、別の例で言いますと、神田橋條治さんという大変ファンの多い精神科医がいます。臨床心理の方とよく勉強会をやっています。その集まりを記録した小冊子を読んでいますと、やはり明らかに転移が起こっています。そこは神田橋さんの言っている言葉の内容を学習する場ではなく、神田橋さんが楽しそうに自分の臨床経験を話す場なのです。つまり、臨床に対する自分の欲望を臨床心理士の方に分け与えているという感じがするわけです。この転移関係を通じて師弟関係が育まれているという感じがします。これは教育のあり方にも通じるところがあると感じしたので、

例として挙げさせていただきました。

穂刈：ありがとうございます。そろそろ時間ですが、せっかくの貴重な機会ですので、二名ほどフロアから感想なりご質問なりいただければと思います。

港道：甲南大学の港道です。僕なりに「育てる」という過程を考えてみると、特にこの社会では市民としての社会性を育てるところが決定的に欠落しているように思われます。

例えば、先ほど話に出たフランスでは四年前に大統領選挙がありました。一回目の投票の結果一位と二位になった候補で決選投票をする方式です。一回目のときに当然残るであろうと思われる左翼の候補が落ちて、右翼のジャック・シラクと極右のジャン＝マリー・ルペンが残ります。みんな驚いたんですが、その結果が判明したその日の夜から、高校生がフランス中で集まり始めてデモを始めたんです。第二次投票が行われる一週間前に至るまで、毎日毎日デモが続きました。

なぜかというところ、ジャン＝マリー・ルペンは人種差別主義者なのです。ところが今の高校生のレベルでは、小学生の頃からいろいろな人種、いろいろな民族の同級生と一緒に学んできています。ですから、外国出身、移民の子だけ切り離してフランス人を区別することは、子どものレベルでもうできないわけです。これはある意味で、フランスの教育の成果でもあります。

日本の社会に目を移したときに、「なぜ人種差別は悪いのか」とか、「なぜ劣化ウラン弾を使っちゃいけないのか」ということが、家庭の内部で話し合われることはほとんどない。つまり、一人の市民として次の社会を選択していく能力を、親も開発しなければ、学校も開発しなければ、ビジネススクール化しつつある大学でもできない状態になっている。これも非常に大きな問題です。もし親にできないければ、ほとんど未来はないのではないのでしょうか。ジェンダー問題も含めてですが、どうなんでしょう。未来がありそうだと思う方はいらっしやいますか。

穂苅：なかなか難しい質問ですが、どなたかお願いします。

横山：先ほど汐見先生にコメントするのを忘れていました、ちやうど港道先生の発言と重なりますので言わせていただきますと思います。汐見先生に研究会に来ていただいたときに帰り道が一緒になり、いろいろな話をしました。汐見先生は戦後の日本のあり方に関して、かなり絶望感を持っているようです。「話を聞いたときは、あなたのことをポストモダンストかと思った」と言ったら、「全然違います。もっと古いんですよ」と言っていました。

このまま行ったら大変なことになる。港道先生は今「市民」という言葉を使いましたが、本当に市民というのはいったいどこにいるのかというぐらい、日本は崩壊してしまっている状態でしょう。彼はそういう絶望の上に、「自然発生的

に出てきた親父の会は、ひよっとしたらこれまでのムラ社会と違うんじゃないか、と期待をかけているんです」と言っておられて、非常によくわかつたんですね。

そのとき、阪神・淡路大震災も話題になりました。関東大震災のときには朝鮮人の虐殺が起りましたが、阪神・淡路大震災では自然発生的なボランティアが生まれてきた。これは、市民社会の成熟度という観点からすると大きな違いです。ところがその後、その組織化はあまりうまくいっていない。これは本当に端緒に過ぎず、日本ではまだまだ育っていない。私は国家権力が七〇年代の状況に懲りて、市民の動きをずっと潰してきた結果だと思っています。それをこれから草の根的につくれたらなんとかなるけれども、それ以外は、やはり滅亡しかないと思います。

穂苅：どなたかもう一名いかがでしょうか。

発言者1：私は、短期間ですがP&Gに勤めていたことがあります。子育てをしている人たちについて、すごく理解のある会社だと思います。ただ、同じセクションで子育てしながら働いておられるお母さんがいたんですが、その方は時間短縮で入っていて、四時上がりのはずなんです。九時ぐらいまでおられました。「仕事が早く終わったなら帰っていいよ」というスタンスで、早く帰れるようにサポートする意識は全くない上司だったんです。

ダイバーシティというのは、子育てをしている人たちの

ことで語られることが多いと思いますが、独身男性も多いですし、P & Gには独身女性もたくさんいます。これから多様性がどんどん進んでいく中で、二つのグループに分かれてしまっていると感じられたので、そういう中での取り組みや心理的なものについてコメントをいただけたらと思います。

中里：貴重な情報をどうもありがとうございました。社員の方に直接お話を伺うのはなかなか難しいのですが、そういうことはあり得ると思います。「終わりのない旅」と会社の人たちも常に言っています。セクシオンによって差があることは実際認めていらつしやいました。そこで実例を話した人も、「自分は日本人の中では早く帰るほうのグループになっている」とおっしゃっていましたので、みんなが早く帰るわけではないようです。

きつと少しずつ浸透していつているんじゃないかとは思っています。理解のある上司が出てきているということもあるようです。二〇年ぐらい前は、女性の最初の仕事は上司のカップの柄を覚えることだったと聞きました。それが徐々に変わってきたのであって、急には変わらないということではないかと思えます。

多様性ということとは、子育てする人がいるというだけではなくて、独身の人もいるということですね。当然、子どもを持っている人だけに優しい会社であってはいけないと思っております。お答えになつていくかどうかわかりませ

んが、ありがとうございました。

穂刈：では、これで最後になりますが、もう一名うかがいます。

発言者2：東灘区で一歳九カ月の女の子を育てております。今日のシンポジウムは、高石先生のインターネットの相談室のファンで参加させていただきました。ありがとうございます。

斎藤先生のお話で、昔に比べて若者の殺人数は減少している、昭和五五年から横ばいだということでしたが、今子育てしている者からすると、新聞を開くと毎日、親が子どもに殺されるような事件ばかりが目につきます。極端な話ですが、こうやって育てている子にいつか殺されるかもしれないという不安感があるんですね。そういうことが育てることをすごく困難にしていると思うんですが、なんでそうなるんでしょうか。

斎藤：私の話と「育てること」がうまくつながる話題を出していただきまして、ありがとうございます。今、若者論というのはいすごく売れるんです。出版社の企画で若者たたくの本は必ず一定の部数売れます。若者論はどの時代にもありますが、現代は特に流通しやすいく状況にあります。若者は、ある意味見て楽しむものというか、見物の対象になっているのです。若者がするからニュースになるようなところがあって、それが特に動機なき殺人や親殺しだと、その

背後にある物語が人々を魅了したり、たくさん読まれたりしやすい傾向があります。そういうニーズがあるので、どうしてもメディアはセンセーショナルに報道しますし、みんなもそれを読んで「ああ、怖いな」と思うことが、延々と繰り返されているわけです。

ただ、メディアはかなり恣意的に記事を選んでいきます。ベタ記事でいいものも大きく取り上げたりする。メディアの報道というのは、バランスを欠くことがしばしばあります。例えば先ほどの社会性の問題も絡むと思いますが、イשראלとレバノンの戦争になっている状況でも、芸能人のわいせつ事件のほうがはるかに大きな話題になったりする状況はたくさんあります。偏りのあることがまず大前提なので、ある程度メディア・リテラシーも必要です。この言葉をここで使っているのかわかりませんが、どの程度のものかは背景を知りながら読んでいく必要があるだろうと思います。

少年事件が昔から起きていることはさきほど申し上げたとおりです。例えば最近女子高生がタリウムでお母さんを毒殺しようとした事件がありました。戦後間もない時期にも中学生がしかられて一家全員を毒殺したような事件がありました。全然珍しくないんですね。首を切つて殺害した事件、なんていうのも昭和三〇年代によくあったようです。「よくあった」は大げさかもしれませんが、少なくとも今新しく起こっている現象ではありません。これは、昔の新聞記事を定期的にネットに載せている奇特な方がいて、

そういう人の記事を見るとよくわかります。

中井久夫先生が書かれていましたが、警察に詰めている新聞記者は、昭和三〇年代までは、少年事件とわかるとつまらないから帰ってしまったそうです。要するに昔はありふれていて報道価値がなかったわけです。ところが、今は珍しいのでセンセーショナルに報道する。希少価値が高いので、たくさん報道されるといいう状況になっていることを踏まえて読んでいただく必要があるのではないかと思います。

全体としては、日本でも国際的に見ても若者は非常におとなしくて、平和で、愛に満ちています。それは、社会性のなさにつながるのかもしれませんが、バランスを取る意味で申し上げておきたいと思います。

穂苅：ありがとうございます。まだまだシンポジストの先生や指定討論の先生へのご質問もあるかと思いますが、残念ながらもう時間を過ぎておりますので、今日はこれで終了することといたします。本日は皆さまに長い時間おつき合いました。ありがとうございます。